

## 雑事記 (23)

「見物記とエッセイ二題」

盛丘 由樹年

### 哲学の館やかた見物記

哲学にちなんだ場所・建築物を紹介しよう。首都圏で、以下に5カ所を挙げる。

それらの場所で、聖賢とされる人物の画像や彫刻に出会うことができる。哲学というと、高尚な印象があり、難しすぎてよくわからないところがある。広い意味で、宗教や、政治・経済・社会の理念も哲学に含まれるから、哲学は総合的な学問だ。いろいろな思想・教義・学説があり、それぞれに奥深さがある。中には科学的な証明ができないような理論や仮説があるのだから、先人たちが、特に賢人と呼ばれ、後々の世に名を残している人たちがまじめに考え、議論して導き出した理論などは、あなたのような浅はかな考えと比べ、格段に重みを持つものと思わなくてはならない。「それらは昔の考えであって、今では通用しない」という言い逃れはできるけれど、時代遅れと考えるのは早計だろう。

信仰、崇拜、忠誠、モラル、おきて掟といった人の心を規制するものの根底には哲学がある。人権として自由が個別に尊重・容認される場合があるし、社会的な共通ルールとしての規制策が優先されることもある。それらは人々に文化的に培われ、継承される。哲学は信念や倫理として人びとの心に宿るものだろう。哲学の空気がただよう場所に行くのも「一興」だろう。中には、個人的な道楽として集めたような文物が収蔵されている施設もあるから、おもしろい。今ではほとんど公共的な施設になっており、公開時間が限られているが、無料で入場できる。

#### ① 哲学堂公園

私はテレビで、そこに幽霊の門があると紹介され、その珍奇さに興味を持った。東京都中野区にある。新井薬師駅から北へ歩10分のところにある公園であり、その中にいくつか興味深い建屋やオブジェがある。横穴もあるというから、2010年5月4日に、私はい

せいそと出かけた。

新井薬師駅から行くと、妙正寺川を渡ってすぐの四村橋口から公園内に入る。庭園には菖蒲池があつて、季節の草花が咲いている。

ここは、個人が設立した施設だったが、今では中野区立の公園として、管理されている。日本式庭園や広場があり、野球のグラウンドやテニスコートもある。区民の憩いの場になっている。

小高い公園エリア中央に広場がある。いくつかの古い建屋が広場を取り囲むように寄り集まっている。それとともに創建当時植えた何本かの松の木がかなり大きくなっている（伐採しようという声が出ている）。東洋大学の創立者でもある井上円了が、当初は学校を新設するために土地を取得したものだ（えんりょう）けれど、その学校は断念せざるを得ず、代わりに、哲学研究（円了の専門は哲学）の場として独力で作り上げた。聖賢を祭りあげ、人々に精神修養を促すことを目的としたという。

明治37年に最初に四聖堂を作り、数年かけて次々に周辺の建屋を建設していった。自由な立場で自分の世界観を反映させた構成になっているようだ。公園内の歩道に沿って哲学にちなんだオブジェや石碑を置き、

それぞれに意味を持たせている。哲学堂公園は、パンフレットによると、「哲学のテーマパーク」と称している。ある種の宗教施設というべきかも知れない。それらの古い建屋には、物々しい名前がつけられている。

- ・ 哲理門
- ・ 四聖堂
- ・ 無尽蔵
- ・ 六賢台
- ・ 鬼神窟
- ・ 絶対城
- ・ 髑髏庵



哲理門  
左右の小部屋の中は暗くてよく見えないが……

哲理門は、哲学堂の正門として建てられた。左右の小部屋には、陰と陽を象徴する像が収められている。この世界には陰と陽があるという哲理を表している。格子を通して暗い中を目を凝らして見ると、幽霊と天狗の像がある。薄気味の悪い幽霊像と威嚇する姿勢をとる天狗像は、子どもが見ると、そうとうに怖いものだろう。ちやうど姉と弟らしい二人の子どもが門をくぐったが、それらに気づかなかったようだ。



六賢台  
朱塗りの木造建造物

地味な建築物が多い中で、一番目を引くのは、六賢台と称している六角形の三重塔だ。東洋の六人の賢人たちにちなんだ建物で、聖徳太子、菅原道真、荘子、朱子、竜樹、迦毘羅が祭られている。

これはパンフレットによると、「哲学堂公園のランドマーク」だが、ランドマークというほど大きなものではない。入り口から螺旋階段らせんをのぼり、上ま

でいくと、下りになる。一方通行で降りてこられる仕組みになっている。一般的にこれは栄螺堂さざえだうと言われているものだ。

四聖堂は、4人の聖人を祀っている。4人の聖人とは、孔子、釈迦、ソクラテス、カントだという。釈迦の寝ている姿の像には妙にリアリティがあり、ぞっとさせられた。

その建屋は、仏教の寺によくある堂だ。1000年以上経っている。地震による崩壊が心配され、耐震対策が必要なようだ。

倉のような建築物・絶対城は、図書館だった、内部は二階建てだ。書棚に今では本は一冊もないが、以前は、哲学を研究する資料として、多くの本が置かれていたのだろう。

そのパンフレットには、公園をのんびり歩くだけで「哲学体験」ができる!、とある。いくつかの「見どころ」を巡って歩いてゆく。



皇国殿の中にある聖徳太子像

野外にも、世界の賢人たちのレリーフや像が展示されている。唯心庭付近から人道用の橋で妙正寺川を渡ると、「哲学の庭」があり、ほぼ等身大の「偉人」たちの、黒光りした彫像が輪になって、あるいはたむろするように置かれている。これらの像を見て回るだけで、気分は哲学者になる。これらの像は、製作者の「思い入れ」があるから、実際の本人とは異なるかもしれない。

い。実際の人物が、何を語って、どのように行動したかは、あなた自身の想像力で思いをはせてみるとういだろう。

昔あつた洞窟に関して、その壁面が石組みで工事されたため、もう見ることはできないことが、私には心残りだった。

## ②湯島聖堂

2010年10月23日、私は御茶ノ水駅から徒歩2分の湯島聖堂を訪ねた。御茶ノ水駅の近くには、ニコライ聖堂があつて、これも一見の価値があるだろう。

湯島聖堂の門構えが立派だ。石の階段が時代を感じさせる。ここは江戸時代、幕府の昌平坂学問所があつたところであり、かつては日本の学問の中心でもあつた。本堂の建屋（大成殿）は、重厚なつくりになつてゐる。もともと江戸・天保年間に孔子廟として建てられたが、関東大震災で消失後、現在の建物は、昭和10年に再建された鉄筋コンクリート造りだ。中に入ると、孔子を始めとする儒教の偉人たち（孟子、顧子、會子、子思）の像がある。まさに儒学の殿堂のようなところだが、質実であり、華やかな装飾や付帯物はなく、質素なたたずまいだった。

隣の敷地に入つてゆくと、庭の一角に高さ4・6メートルほどの巨大な孔子銅像が立っているのに驚かされる。その横に斯文会館<sup>しぶん</sup>という看板を掲げた古めかしい建屋があり、格式の高さが現れ出ている。斯文は、論語にある言葉で、儒教にちなんでいる。今でもここは論語素読などの文化講座を開いているから、学校として機能している。



巨大な孔子像

その後、2017年4月23日（日）に「孔子祭」があるというので、私は開始時間よりやや遅れて行つてみた。本堂の中では、学者らしい人が孔子に関する講義をしていた。聴いていたのは、礼服を着た高齢の人たちと共に女学生たちの一団だった。中央の祭壇を

囲うように、パイプ椅子が配置され、指定席になっていた。彼らはそこに座っていた。私のような門外漢は立って話を聞くことになる。それは、お寺で僧侶が説教をする光景とよく似ている。

支援団体の会長の挨拶の後、終わりにその女学生たちが「湯島聖堂の歌」とやらを斉唱した。私は、彼女らのすぐ後ろに立って聞いていたのだが、意味深い言葉が多く、よく聞き取れなかった。

### ③ 八聖殿郷土資料館

三溪園に行ったとき、その高みから眺めると、海岸沿いの平地に公園があつて、その中に中国風の変つた建物群が見えていたから、興味を引かれた。さらに案内書などによると、特異な三層構造の八角形の建屋である「八聖殿郷土資料館」が近くにあることを知った。後日、訪ねてみようと思つた。

2014年3月9日、私は根岸駅からバスで公園へ行つた。本牧市民公園<sup>ほんまき</sup>という、やや交通の便が悪いところだ。この海岸沿いの近隣の一帯に巨大な石油タンクが並んでいるのが、風光明媚を台無しにしている。そのためか、ここは、人が少なく、比較的閑散とした公園だ。



本牧公園の中国風屋屋  
池の中にある

池の島にある中国風の建物は、日中友好記念に建てられたものだった。本格的な中国建築であつて、遊園地にあるような模造建築ではないわけだ。東日本大震災後、耐震に問題があるとのこと、建屋には近寄れなかったが、外観は絵になる。池には水鳥がいて、バードウォッチングにも好適だろう。

さて、公園やプール施設を通り抜けると、小高い丘の森の中に八聖殿がある。コンクリート造りの大きい建屋であって、古さを感じさせない立派なものだ。



八聖殿郷土資料館

施設の紹介文によると、

八聖殿は、法隆寺夢殿を模したという三層楼八

角形の建物で、熊本県出身の政治家で通信・内務大臣を歴任した安達謙蔵(あんだ けんざう)が建立し、1933(昭和8)年に完成した。1937(昭和12)年、横浜市に寄贈され、建物の周辺一帯は本牧臨海公園となり市民の憩いの場として整備された。

1973(昭和48)年「横浜市八聖殿郷土資料館」と改名され、市民に郷土の歴史を伝える資料館として、幕末から明治にかけての本牧、根岸の写真や市内で使われていた農具や漁具を中心に展示している。

安達謙蔵は、個人的な別宅として建設したけれど、完成から4年の短期間で横浜市に寄贈したことになる。2階の奥の壁際に、黒光りする等身大の八聖の像を置いている。いずれもそうそうたる彫刻家に制作させたものだ。

安達謙蔵が選んだ八聖とは、以下の人だ。順不同。

釈迦、キリスト、ソクラテス、孔子、

聖徳太子、弘法大師(空海)、親鸞、日蓮

安達謙蔵は、ここを哲学研究の場としたかっと思われるが、施設の完成後まもなくして市に寄贈し、運

営を任せた理由はなぜだろうか。第一に挙げられるのは、こうしたものを個人で所有して眺めているのは「宝の持ち腐れ」的な感覚を抱くようになり、多くの人に活用してもらいたいと考えたことだろう。



二階の一角にある八聖の像  
手前の像は聖観音像（鶴見の花月園  
にあったもの。かなり美的）

横浜市がこの建物を郷土資料館にして、古い漁具や農機具など（ほとんどガラクタ類に見える）を集めて、並べて置いているのは、安達謙蔵氏の本来の思いとは違うのではないか。

#### ④大倉山記念館

2017年2月12日、大倉山駅から歩いていった記念館まで行くには5分ほどの近さだが、上り坂と階段を行かなければならない。この記念館は、今では公民館的な施設として横浜市で管理されている。講堂や小部屋が発表会や会議室として利用されている。広い敷地は、大倉山公園になっている。つまり哲学堂公園とかなり似た経緯で、今日に至っているようだ。

記念館の中にある図書館はかつての蔵書をほぼそのまま保管し、公益財団法人精神文化研究所付属図書館として管理・運営されている。一般貸し出しを可能としている。

この日は日曜日で、ボランティアの人に案内してもらい、私たちは正面の塔の一番高いところまで上った。創立者大倉邦彦が個人の財力で昭和7年に心の修養と研究・教育目的の研究所として設立した。この記念館は第一級の建築物として、見ごたえがある。威容を誇るような外部には時代をゆく豪華さと堅牢さがあり、内部も重厚な造りだ。壁やドア、階段の造りや装飾にも巧緻が凝らされている。ヨーロッパ貴族の館やかた的な雰囲気をもっている。



精神文化、つまり哲学を研究し、座禅（瞑想）を体験する場としての施設だった。2階の回廊で、学生たち（研究者たち？）が座禅を行っていたという。



大倉山記念館の正面  
堂々たる威容

精神文化研究所のシンボリックな曼茶羅の絵図がある。元は研究所の貴賓室に掲げられていたが、今では、半ば隠されているかのように、図書館閲覧室の壁にある。

大倉邦彦が創案し、仏教学者・辻善之助らが選定した日本の精神世界の中心人物たちだそう。日本画家井村方外によって精細に描かれている。神道、儒教、仏教の各界で影響力を持った人たち、全10人の人物像だ。



日本精神文化曼茶羅  
2メートル四方ほどの大きな絵  
ガラスの覆いがあるため、蛍光灯の光を  
反射している。

中心にあって、ひととき大きく描かれているのが、

聖徳太子だ。その他9人は、以下の人たちだ。

神道…北畠親房ちかふさ

儒教…菅原道真

仏教…最澄、空海、栄西、親鸞、日蓮、道元、法然

読者の中には、「この人たちは、そんなに偉いの？」という疑問をもつかもされない。それが哲学を学ぶ第一歩だろう。

### ⑤鳥居観音

2017年4月30日に、私は八高線の東飯能駅に降り立ち、バスに乗った。実は、降りてまもなく、ちょうどバスが来たのだが、行き先の路線をよく調べていなかったものだから、乗るのをためらい、私は取り残された。そのバス停で待っていた5、6人が全員乗り込んだのに……。バスは同じ道を行くバスでも、行き先がそれぞれ異なる。まもなくそれに乗ればよかったですと気づいたが、仕方なく、私は約30分後の次のバスを待った。

鳥居観音は、飯能と秩父の間の山間部にある。名栗川（入間川）に沿って30分ほどバスにゆられ、バス

停・連慶橋で下りた。道を歩いていくと、前方の山上に白いロケットのようなものが立っている。実はコンクリート造りの観音像だ。その左右に、やや小さい脇時の観音を従えている。日本には巨大な仏像がいくつあるが、この観音像はあまり有名ではないのが、おしい。交通の便が悪いからだろうか。なお、「鳥居」はこの地区の名から来ている。

ここ、白雲山鳥居観音は、宗教施設の一つに入るものだが、美術館的アート施設の意味合いもある。インドや中国の様式を取り入れた作品や建築物がある。そして、巨大な観音像が丘の上に立つ。山の広大な地域を「観音郷」として造り上げられている。

本堂は大きな建築物ではないが、二層の構造で、珍しい形をしている。中に入ると、祭壇には、豪華絢爛の観音像がところせましと十体ほどある。彩色が鮮やかで、けばけばしきがある。本格的な像ばかりで目を見張らせる。壁や天井にも、仏教説話的な画像が描かれている。窓のガラスにも装飾が施されている。いずれも近年になって作られたものだ。

本堂の傍らには、八角形の二層の建物がある。その「鳥居文庫」には、開祖・平沼彌太郎の多くの蔵書や資料が保存されているというが、私が行ったときには閉められており、中に入るためには、鍵を開けてもらう必要があつて、入れなかつた。本道の近くには達理館という建屋もある。名前が哲学的だ。



鳥居観音・本堂

「鳥居文庫」の脇にある登り口から、山の中の遊歩道を行く。上り坂が続くから、ちよつとしたハイキングコースになっている。山の中に点在する建造物、構造物、モニュメントをみて歩くことになる。巨大観音像を目指しながら、仁王門、玄奘三蔵塔、異国的パゴダのようなものを巡っていく。ある意味で、宗派を超えた、アート作品の寄せ集めの施設になっている。



鳥居文庫

創設者の「趣味」（世界観）が色濃く反映されている。出口付近には、竜宮城のような玉華門、トータルポールのようなまで立てられている。



救世大観音

メインは、丘の上にある巨大な観音像だ。救世大観音と称されている。中央の像は台座を含めて高さ33メートルあるという。昭和46年に完成されている。



台座の中の彫刻群の一つ、不動明王

その台座の部分のが、仏像展示エリアになっている。私は受付で拝観料を払って、一通り見てきた。中まで入る見物客は私のほかにいなかったから、じつくりと……。見上げるような大きさの吉祥天、阿弥陀、不動明王、さらに1メートルサイズの三十三観音像群などが展示されている。天井や壁の装飾も見事なものだ。

巨大観音像の胎内の中央には、らせん階段があり、頭の後ろのところまで登れる。私の体力ではしんどいのでやめたかったが、せっかく来たのだから、上ってみることにした。係りの人に、この高さでは風が強

いから、もどるときには上のドアを開めるように言われた。写真で、観音さまの頭の後ろに檻かじのようなものについているのが見えると思うが、そこが展望台だ。下界を見下ろすことになる。鳥のように風に乗って飛んでいけそうに思ったりする。でも、そこから飛び降りることはできないようになっていた。

これらすべて、白雲山鳥居観音の開祖でもある平沼彌太郎（桐江）が、昭和20年代から50年代にかけて企画・作成したものだという。こうしたものを作り上げるためには、造形の才能だけでなく、財力も必要だ。もちろん気力と体力も必要だ。平沼氏個人の財力、およびその妻・とみ氏や交友関係者や協力者からの支援を受けて作り上げたのだから、たいしたものだ。平沼彌太郎氏は、趣味としていた彫刻の腕を磨くため、高名な彫刻家に師事し、本格的な仏像を作るようになった。人望があり社会的に成功した多才な人であり、要職を辞してから超人的に作品作りに没頭したという。救世大観音の足元まで、専用の車道があり駐車場が用意されているのだが、やはり景色を眺めながら、思索しながら、歩いて回るのがいいだろう。

## 拾いもの

捨てるカミあれば拾うカミあり。  
私は若かったころ、清掃をボランティアで行うグループ（仕事とは別だが、会社主導）に属していたこと

があり、今でも道路や公園でゴミを見ると、つい拾って片付けている。町をきれいにしようという殊勝な心がけなのだ。でも、人が見ているようなところでは、手を伸ばさない。少々気恥ずかしい行為だからだ。奇異な目で見られては困る。彼らに、「何か、金目のものを拾ったのね」と誤解されるかもしれないし、あるいは「あの人、モク拾いをしているのかしら」と見下されたりして……。ゴミ以外にも、落ちているものがある。これは使えそうなものだと思うと、手が伸びる。ただし、道を歩いているときなど、雑念の多い私だから、落ちている物に注意を払っているわけではなく、たまたま目に留まるのだ。

近ごろ、手にしたものを以下にあげると――

### ①ボールペン

私はこれまで数多くのボールペンを拾った。時には、自分でも失くす場合があるが、拾う方が多い。道路上

ではもちろんのこと、大学の構内で、講演会やシンポジウムの会場で……。誰かが落としたりというより、故意に捨てたようなものもある。たいてい安物のボールペンであり、使い捨てられたものかもしれない。インクがなくなり書けなくなったものも多い。でも、そういったものは、替えしんを新たなものにすれば、りっぱに使えるものだ。替えしんの長さが合わなければ、カットしたりする。私は何種類かの替えしんをもっている（買いためている）から、ほとんど交換でき、使えるようにする。その数が多くなり、自分では使い切れないから、家庭用に供出したりしている。それがよくボールペンを失くす（捨てるカミさんあれば……）。

## ②イヤリング

きらつと光る小さなものが、道に落ちていると、何だろうと目をやってしまう。それは女性用のイヤリングであったりする。私にはまったく価値がないものだけれど、珍しいものとして拾って、コレクションとしてたんすの引き出しに入れていた。複数個たまつた。しかし、これは一対あって、はじめて意味をもつ。片方のイヤリングだけがあっても役に立たない。片方を落としたら、もう片方も使い物にならず、価値を失ってしまう。落とし主は二つとも失ったような、悔しい

心境だろう。基本的に、これらは拾っても警察に届けるべきだろう。今、引き出しに入れていることを少々反省している。

## ③チェイン／ストラップ

小さな球状の金属でつながれた6、7センチほどのチェインが、時々落ちていく。この種のチェインは、外れることが多いようだ。ちよつとしたことに使えるので、私はコレクションにしている。携帯電話用のストラップも外れやすいようだ。

## ④カード

先日、道路でスイカ機能付のクレジットカードを拾った。これは警察に届けなければならない。落とし人が困っていることだろう。駅の切符販売機にかけてみると、500円ほどの残金があった。ちよつど駅で電車に乗る予定だったから、これを使えばいいという、内なるささやき声があったけれど、改札でそんなスイカを使えば、改札システムがカードナンバーを認識し、時刻を記録し、駅の防犯カメラがきっちり動画を記録しているはずだから、警察が調べれば、私が不正に使ったことが簡単にばれてしまう可能性がある。500円ぐらい得したとしても、それでは割に合わない。私はその駅の近くの交番に届けた。お礼はいらないとし

た。

### ⑤ ポリ袋（レジ袋）

ポリ袋はよく落ちていている。買い物をするれば多くの店舗では無償でくれるものだから、こころない人たちが商品を取り出したあと、要らなくなり、ポイと捨ててしまうのだろう。ふわふわと風に舞い、道路上にも飛んでくるから、車の運転の邪魔になったりする。

資源として活用できるので、私はよく拾っている。

特に、駅へ続く道を歩いているときに拾い集めたゴミを、そのポリ袋に入れ、まとめて公共施設のゴミ箱に捨てる。ちようどいい活用の仕方だと思っている。

私は買い物するときポリ袋をもらわないようにしている（ポリ袋をバッグに忍ばせている）。なじみのスーパーではポイントをつけてくれるので、わずかなメリットがある。コンビニエンス店でも、それを出すようにしている。それでも拾ったりもらったりするほうが多いので、ポリ袋がたまり気味だ。ポリ袋をためたくないから、もらわないようにしているわけだ。ポリ袋を有効活用しなければ、気がすまないところがある。

家では、私が寮生活していたころ（20代前半）から50年近く使っているクズカゴに、ポリ袋を広げて入れる。そのクズカゴは私の机のそばにいつも置いて

いる。その中がごみでいっぱいになると、口を閉じて、そのままゴミ集積所に持ち込む（曜日と時間が決まっている。間違つて出すと、業者に持つて行つてもらえないし、近所の人に見つかる要注意される）。一般的に家庭ごみを出す時には、そのためのポリ袋を新規購入していることが多いが、それは「ゴミを購入しているようなもの」なので、私には抵抗がある。

### ⑥ 飴／チョコレート／ジュース

飴を拾った。飴は丸い粒で、ねじられた紙に包まれたものだった。こういうものは、私は基本的に食べてしまう。それなりにおいしい。道に落ちているものを汚いと思つては、味わえないことだろう。私は、きちんと包装されていれば、中身はきれいなものだと思いたい。

こないだ、チョコレートを拾った。見かけでは完全にゴミだった。小さな紙の箱は、何度か人の足に踏まれて、つぶれていた。ところが、手に取ると重さがあり、中身が入っていることに気づいた。紙に包まれた小さい板状のチョコレートが3粒ほど入っていた。思いがけず、ラッキーなバレンタインのプレゼントだった。その日は2月12日で、バレンタインの日より2日早かった。

ある朝、わが家の近所の路地で、箱入り（小さいパック）のトマトジュースが落ちていた。まだ空けられておらず、中味が入っていた。毎日通る道だから、近所の人が最近落としたものだろうけど、「トマトジュース、落とししましたか？」と尋ね回るほど、私は親切ではない。車が通ってつぶされたら、始末が悪くなる。

私はそれを「ゴミ」として拾い、賞味期限を確かめ、中身を飲んだ。たとえ箱に注射針の穴がひとつあったとしても、私は気がつかなかったことにする。

少々あさましいだろうか。そもそも我々の先祖たち・狩猟採集民は、野山に分け入り、拾って食べていたわけだろう。

### ⑦鳥の羽

ある秋の朝、公園を通る道に、羽が落ちていた。この羽は長さ13センチほどで、ほとんど黒いが、先の部分が高い。ハトの羽のように見えるが、この付近でたまに見かけるヒヨドリのものもかもしれない。コレクションする感覚で拾った。この種のものは、これで2つになった。鳥の羽毛などはフライフィッシングの擬似ばりを作る材料になるから、私はときどき拾っている。後日、有効利用を思いついた。めがねレンズやパソコンの画面についたほこりを落とすのにそれを使う。

昔、私が職場で消しゴムのかすを払い落とすために使っていた、鳥の翼の羽で作られた道具（品名は忘れた）を連想したのだ。めがねケースの中にその羽を入れて、ときどき役立たせている。

### 優先席

2017年5月27日（土）の朝8時すぎ、私は秦野駅で小田急の急行に乗った。本厚木駅の近くで開催の、同好の人々との会合に参加するためだった。20分ほどの乗車時間だが、立っているよりは、座っていたい。私は乗り込むと、優先席に空席を見つけ、座ることができた。私も高齢者の一員といえそうだから、近ごろは、一般席に空きがなければ、ほんの少し遠慮しながらも優先席に座ることになっている。急行といっても、このへんの区間では各駅に停車する。上り電車は、駅に停まることに乗客が増えて、混み合ってきた。ある駅で、うら若い女性が私の前に立った。細身の体にカジュアルなジーンズをはき、明るい色のシャツをつけていた。幼さが残りながらも、コケティッシュな色気を漂わせている女性だった。腹の辺りをよく見る



と、かすかに丸みを帯びていた。へん、これは？

シヨルダーバッグを見ると、幼児がデザインされたピンクのマタニティーバッグが付いていた。私は、瞬間的に腰を上げて、席を譲ることにした。彼女は「いいです」などと言って、身振りを交えて断ろうとした。

でも、私がある場所を離れてから、振り返ると、彼女がそこに座ったのが見えた。彼女の前には、若い男が立っていた。普段着姿で、無言で彼女の方を向いていた。

おそらく彼女の交際相手であり、妊娠させた「張本人」なのだろう。この若いカップルは将来に渡つてうまく子どもを育てて行けるだろうか、と一瞬邪念に似た疑問をもった。

その数日後の6月2日（金）7時すぎ私は、1956年アメリカ製作の長編映画「戦争と平和」（トルストイ原作）を見に行くために、新宿行きの快速電車に乗っていた。練馬区の文化施設で開催される映画の上映は午後からだったが、午前中から希望者に整理券が配られるというので、早めに出かけた。無料で観られる映画なので、満席になることが予想された。（やはり、多くの中高年の人たちが満席になった。）

ちようと通勤通学のラッシュアワーの時間だったから、その快速電車は混んでいた。秦野駅で乗ったとき、

空席は見つけられなかった。優先席付近は、比較的混んでいないので、そこへ進み、私はつり革につかまった。途中の主な駅で降りる人も多くいるので、そのうち座れることが多いのだが、このとき運悪く、私の前の乗客は終点の新宿駅までずっと座っていた。混んでいる上に、快速電車なのに、朝方は途中かなりの区間で徐行運転するから、いらだたしさが募った。新宿までの1時間20分ほどを立ったままにいることは、もう若くない私にとってしんどい。

さて、その途中、小さな事件が起きた。

細身で暗い色の地味な服を着て、清楚な感じの20代に見える女性が、同じように私の隣に立っていた。ちらちらと見ると、彼女はずっと眠たげだった。彼女は左手の薬指に指輪をつけていたから、既婚者なのだろうと推察した。優先席エリアの一番奥の、車両の連絡ドアのところにもたれるように立っていた。電車が多摩川を渡ったところ、突然、彼女は体を崩し、その場に蹲うずくまった。こんなところで若い女性がしゃがみこむのは異常事態だった。彼女の前に座っていた長髪のメガネ男は、彼女の肩に触れた。指でたたくようにした。しかし、反応がない。

「だいじょうぶですか？」と男が声をかけた。それに

も答えず、ようやく女は無言で立って、つり革につかまった。

「席を替わりましょうか？」と男がまた声をかけたが、女は手振りで断った。女は立ってほしいのだろうか。

そうとは思えないが……。

長髪男はさきほどまでスマートフォンをいじっていた、いまだきの若者だった。優先席に座る資格などありそうもない。女が手にもつていたバックを見ると、

「ん？、あのバッチだ！」

マタニティーバッチが付いていた。女が電車の床に座り込んだ事情がわかったような気がした。見かねて、私も女に声をかけた。周りにも聞こえる声で、「あなたは座ったほうがいいじゃないですか？」

しかし、女の耳には聞こえなかったかのように、反応しなかった。私は、男に手振りで合図した。「立て、席を替わってやれ！」というサインを送ったつもりだったが、男には伝わらなかった。男が立てば、女は座ったかもしれないが、そのままの立場で、時間が過ぎた。男はバッチの意味を知らなかったのかもしれないし、女の意思を尊重したのだろう。私は、車両の壁に備え付けられた非常用の通報機器に気づいた。「四角いボタンを押せば、内臓マイクとスピーカーが起動さ

れる。ことによってはこの機器を使って乗務員に連絡すればいいのだろう」と考えた。

やがて女は代々木上原駅で降りた。他人の世話になりたくないと言いかのごとく、ほとんど悲壮感が漂っていた。人の好意を無にするとどういうことかと、私には不可解さが残った。彼女にとつて見知らぬ男は信用できないし、恩に着ることを嫌ったのかもしれない。

結局、私が新宿駅で降りたときには、足が棒になっていた。足が棒になった感覚が奇妙だった。それでも、倒れずに歩けることが救いだった。西部新宿線に乗り換えるために歩いていたとき、こんなことなら、快速でなく、秦野駅で出発時間が近接していた特急のロマンスカーに乗ればよかったと少々後悔した。